相談室だより　　10月号

気が付けばもう10月。季節はすっかり秋。猛暑続きだった夏は遠い過去のように感じます。毎日の学校生活は楽しいことだけではなく、苦しいこともあるかと思いますが、思い詰めないように。

さて、みなさんは星野富弘さんという方を知っていますか？花の絵に詩を添えた詩画集を出版しておられます。星野さんは不慮の事故で、首から下の部分を動かすことができないため、詩画は全て口に筆をくわえながら描かれた作品です。

＜星野富弘プロフィール＞

1947年　群馬県勢多郡東村に生まれる。

大学卒業後、群馬県の中学校の体育教師となる。部活動の指導中、頸髄を損傷し、手足の自由を失う。

1979年　前橋市で最初の作品展を開く。以後、各地で「花の詩画展」を開く。

1991年　村立・富弘美術館開館

＜著書＞

「愛、深き淵より」、「風の旅」、「かぎりなくやさしい花々」、「鈴のなる道」、「速さのちがう時計」、「あなたの手のひら」　など多数

～「あなたの手のひら」あとがきより一部抜粋～

電動車椅子で畑の道を歩きながら見つけた草花などを採ってきて描いています。地面に生えているその場所で描ければ良いのですが、首の力は以前とほとんど変わりませんから、やはりベッドの上で身体を横にして描いています。

顔の前二十センチのところに画用紙を立てると、他のものはほとんど見えなくなります。ですから描く花は画用紙の横に辛うじて見える一輪か二輪の花になります。でもこの不自由が、私に花の美しさを教えてくれました。あれも描きたい、これも描いてみたいという誘惑から、一輪の花と静かに向きあう事を教えられたのです。

よく見ると、道端の小さな花は、決して小さくはありませんでした。虫に食われた葉っぱ、折れてもなお起きようとする茎、夏の陽に焼かれた花びら、いつのまにか、私は草花に人間を重ねて見るようになりました。

手や足が使えなくなって、できなくなったことはたくさんありますが、できるようになったこともたくさんあります。詩を書くようになったのもその一つです。

（中略）

絵と文字という別のものを、一枚の紙の中に描いていくうちに少しずつわかってきたのですが、絵も詩も少し欠けていた方が良いような気がします。欠けているもの同士が一枚の画用紙の中におさまった時、調和のとれた作品になるのです。これは詩画だけではなく、私達の家庭も社会も同じような気がします。欠けている事を知っている者なら、助けあうのは自然な事です。　　（以後省略）

星野さんの人生論とは？伝えようとしているメッセージは何なのか？そこから何を感じ取れるか？一人ひとりじっくりと考えてみてほしいと思います。

2学期もそれぞれにとって有意義な時間になることを祈っています。